

---

# 白い公園で

椎野 千洋

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白い公園で

### 【Nコード】

N6098C

### 【作者名】

椎野 千洋

### 【あらすじ】

いつまでも降り注ぐ雪、そこは思い出の公園で、僕は彼女に会いに行く。

静寂に包まれた街には小さな公園があつて、そこには壊れかけのシーソーとか錆びきつたブランコが設置されていた。そしてその公園には大きな桜の木があるんだ。春になるとその桜がとても綺麗で、涼やかな風がそこを流れるとまるで粉雪のように花びらが舞う。彼女が一番好きだった場所なんだ。

そんな場所で僕は彼女と別れた。

僕は彼女の事を愛していたし、その気持ちは今でも変わらない。きつとこれからも変わらないと思う。

でも彼女は僕の所から去ってしまった。原因がわからなかったけど、僕には彼女が幸せそうに見えていた。でも今思えば僕の単なる思い違いだったのかもしれない。最近になってそう思うようになった。

そんな風に思うようになったからかもしれないけど、僕は春になる前の冬の季節、久しぶりに彼女と別れたその公園へと足を運んでみた。

公園は相変わらず寂れた感じの場所で、春には美しい桜の木も今の季節では花も葉も纏っていないため、灰色の空に突き刺さらんと枯れ枝を伸ばすばかりだった。それでも真つ白な雪の絨毯が敷いてあるし、空からも綿毛のような雪が美しく舞っていたため、それはそれで綺麗だと思えた。

僕は桜の根元まで行き、そこを背もたれにして雪の上に腰を下ろ

した。空を見上げると枝の間を雪が滑り落ちてきている。美しいけど寂しい。そんな気持ちにさせる景色だった。

「やっぱり来たのね。貴方ってそういう人よ」

突然背後から彼女の声がした。透明な、それでいて物悲しい声だった。だが別に僕は驚きはしない。ここは彼女が好きだった場所なのだ。彼女が居ても不思議ではない。

「うん。本当は来ないつもりだったんだけど、どうしても君の事を忘れられないんだ。それに僕もこの場所は好きだ」

僕は久しぶりに聞いた彼女の声がうれしかった。だからかもしれないけど、彼女も少し笑っているように思えた。

「でももう私達は一緒には居られないのよ。それは貴方にもわかっているでしょ？」

「わかってるさ、でも僕は君が好きだったんだ。今でもそうだよ。もし君が僕を求めるならいつだって僕は君の元へ」

「貴方が好きよ。いつまでも一緒にいたい……でも駄目。私にはわかってたのよ、貴方なら私と一緒に居てくれるだろうって。だから別れるしかなかった」

僕は取り戻したかった。彼女は幸せではなかった。そう思ったからこの場所に来たのだが、それでも彼女と過ごした場所、そして時間、温もり、それが恋しかった。

「僕にはどうする事も出来なかったのか？ 君の苦しみを和らげて

はあげられなかったのか？ 僕はいろいろ考えたよ。そしてもう疲れってしまったんだ」

それから僕と彼女は黙ったまま、積もりゆく雪と静寂の中を過ごした。体は冬の冷氣に体温を奪われ、徐々に雪の創り出す景色へ同化していくようであった。

「見て、この景色をどう思う？ とても悲しくて、とても静かで、そしてとても美しいわ。でもね、もう少ししたらこの白い雪の絨毯は美しい草花に変わっていくし、この寂しい桜の木だって美しい花びらを舞わせるのよ？ 私はそんな変化がとても好きなの。だから貴方にもこの景色のように変わってほしい。私は貴方も大好きだから……」

彼女はそれ以上何も言葉を発しなかった。僕は体に積もった雪と共に沈みゆく心が少しだけ暖かくなった気がしていた。

そして僕は桜の根元から立ち上がり、もう話してはくれないだろうと思ったが、彼女に言った。

「君は怒るかもしれないけど、やっぱりまた僕はこの場所に来るよ。今度はこの白い雪が桜の花びらに変わる頃にね」

その問いかけに、やはり彼女は答えてはくれなかった。

僕は永遠と思えるほど雪を降り続けさせる灰色の空を眺め、そして歩き出した。

彼女の言うとおり僕は変われるのだろうか。やがて厳しい冬の季節が過ぎ去り、新しい息吹が吹く春を迎えても、僕の心の中で降り

積もる雪は溶けていくのだろうか。僕にはまだそれが訪れるという自信が無かった。僕の中にはいつでも彼女が居る。その温もりを捨て去る事はとても難しいように思えてならない。

彼女はもう居ない。居ないのだ。そう思えば思うほど僕は彼女の影を追う。それが死という形であったとしても、彼女が死に居る場所に辿り着けなかったとしても。

僕は公園を出る前に足を止め、もう一度彼女を見ようと振り返ってみた。だがそこに彼女は居ない。あるのは花も葉も無い惨めな桜の木だけだった。

ただ、その桜の木と周りを舞う雪が相まって、僕には少しだけ春の美しい桜の木が花びらを舞い散らせているように見えた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6098c/>

---

白い公園で

2010年10月12日06時10分発行